

68-1 (市川) 下総国分寺を訪ねる (距離約 10km)



弘法寺の鐘楼とじゅんさい沼公園

市川市の「文化のまちかど回遊マップ」を手に入れて多彩な観光スポットがある下総国分寺へと向かう。

【道順】

00JR 市川駅→01 市川駅から市川真間駅→02 桜土手へ→03 桜土手 (公園) →04 須和田公園へ→05 芳澤ガーデンギャラリー→06 亀井院真間の井→06 手児奈霊神堂→07 真間の継橋→08 弘法寺 (ぐほうじ) 参道大門通りから弘法寺→09 木内ギャラリー→10 下総国分寺→11 宝珠院→12 下総国分尼寺跡→13 じゅんさい沼公園→14 道明寺飛地天満宮→15 総寧寺→16 里見公園→17 江戸川堤とハケ→18 市川関所跡→19 京成国府台駅

【街歩き解説】

00JR 市川駅：JR市川駅から多彩な観光スポットのある街歩きを始める。

01 市川駅周辺から市川真間駅：国道 14 号線千葉街道を渡るとすぐ目につくのが、湯浅四郎樹商店。魚や乾物、雑穀を商う店内をのぞいて見るのもいい。そして目にとまるのが、市の木でもあるクロマツと割烹料理店だ。戦前には、東京下町の富豪が市川に別荘を構えたこともあったからだろうか、辺りには大きな割烹料理店が何軒かある。

京成電鉄市川真間駅近くにある地藏山墓地は、松林に囲まれ、敷地中央には、「いぼとり地藏」と呼ばれる延命地藏がある。

02 桜土手へ：かつて、市川の住宅地にはクロマツが広がっていたという。真間銀座通りには、人の通行を遮るような場所に松の古木が二本大切に残されている。そして、真間 1 丁目交差点の向こうには、これも往時を思わせる大きな邸宅が見える。

03 桜土手（公園）：桜土手（公園）の道の片側には、桜の巨木の並木が続き、手軽な散歩コースとなっている。そして、市川で暮らしたことのある北原白秋や永井荷風、水木洋子といった文化人や、ゆかりの万葉の歌を紹介した説明板が随所に立ち文学の道とも呼ばれている。

04 須和田公園へ：西進して江戸川へと注ぐ真間川は、桜の名所としても知られている。真間川笹塚橋を渡り、ハケを上る階段道を上って段丘の上へと向かうと市街が一望できる。上り詰めた、（須和田台）段丘上の柵内には、縄文時代から平安時代に至るまでの集落遺跡が残されていて、全体が公園として整備されている。須和田公園の春は、桜の名所となる。

須和田公園の西には、芳澤ガーデンギャラリーがある。同所は、庭園をいかした美術館として開設され、広い庭園は、よく手入れされた四季折々の草花や樹木で満ちている。

05 亀井院 真間の井：万葉集で高橋虫麻呂が「勝鹿の真間の井を見れば立ち平し水汲ましけむ手児奈し思ほゆ」と詠んだ。山部赤人もまた「われも見つ人にも告げむ葛飾の真間の手児奈が奥津城処（墓所）」と。この真間の井は、亀井院の裏庭にある井戸だと伝えられる。門前手前には昔懐かしい八百屋さんが残る。

06 手児奈霊神堂：手児奈は、その美しさゆえ、多くの男から求婚され、自分のために人が争うのを憂い、真間の入江に身を投げたという。山部赤人などによって歌われた手児奈の墓のあたりに安産、子育ての霊験がある霊堂が建つ。：「我も見つ人にも告げむ勝鹿の真間の手児奈の奥つき処（どころ）」「勝鹿の真間の入江にうちなびく 玉藻刈りけむ 手児奈し思ほゆ」

07 真間の継橋：万葉の時代、この地域にはたくさんの砂州があり、その州から州へのかけ橋が「継橋」だったと考えられている。また、継橋は後世多くの歌人の題材になった。足（あ）の音せず行かむ駒（こま）もが葛飾の真間の継橋やまず通はむ（万葉集）かつしかや真間の入江にさちあれと柳ながめてのせぬ舟人（小林一茶）

08 弘法寺（ぐほうじ）参道大門通りから弘法寺：弘法寺の参道は、市川駅付近からまっすぐに延びている。上り詰める参道石段の正面下から27段目にある石は、涙を流すかのように濡れ続けていることから「涙石」と呼ばれるのだという。

その弘法寺は、行基菩薩や弘法大師の建立伝説がある紅葉の名所として知られた寺で、境内には小林一茶などの句碑と、見事な花を咲かせる伏姫桜と呼ばれるしだれ桜が有名である。弘法寺境内には、その他にも大黒天を祀る大黒堂、鐘楼、仁王門が見どころであるほか、境内北は「萩の里」と呼ばれる眺望の地、南には弘法寺古墳も残る。

09 木内ギャラリー：弘法寺の西、木内ギャラリー一辺りから江戸川に向かって下りる坂を切通し坂と呼ぶらしい。文字どおり両側の擁壁が迫る坂だ。その向こうには、国府台地名の起こりとなる国府神社がある。

木内ギャラリーは、明治から大正時代に活躍した政治家木内重四郎が、別邸として真間の高台に建築した和洋折衷様式の大正近代建築物。洋館部分のみを移築し、ギャラリーとして公開している。

10 下総国分寺：千葉商科大学の南を経て、道標の残る持国坂、あるいはその南の坂道を下りてから住宅街を北へと進む。ハケの下を国分寺へ上る道は、石塔坂と呼ぶらしい。

坂上は、聖武天皇の「国分寺建立の詔」によって建立された国分僧寺跡で、今は往時を模した山門が建てられ、当時の礎石が残されている。

11 宝珠院：宝珠院には、なぜか大きな「やかん」が置かれている。その北東には、その昔、酒に酔った武士が切腹したお墓と伝承される腹切り様がある。風邪や咳にご利益があるとか。



手児奈霊神堂・下総国分尼寺跡

12 下総国分尼寺跡：国分寺からの道筋には庚申塔が2基建つ。そして、国分尼寺金堂・講堂の跡へと向かう。そこは今、公園として整備されている。

その後、西へ出て、再び台地下へと下りると、そこには林を連ねたハケ下の道が続く。

13 じゅんさい沼公園：戦前までじゅんさいが採れたことから、この名前がつけられたという。豊富な水量の池と木々が美しい公園で、公園の北には水生植物園があって、たくさんの水生植物を見ることができる。

14 道明寺飛地天満宮：大阪府河内の道明寺天満宮を分祀したという菅原道真公を祀る小さな神社だが、名前が特徴的だ。辺りは、過去に飛び地だったらしい。

ここから坂道を下ると、国府台緑地に出る。なつかしい雑木林が広がる風景が残る。

15 総寧寺：曹洞宗関東僧録寺の一つで、境内には関宿城主・小笠原政信の供養五輪塔がある。本寺は、滋賀県から関宿、そしてこの地へ移転したという。

16 里見公園：総寧寺境内に隣り合った里見公園は、園に沿った桜並木が有名である。

園内には、北原白秋の旧居「紫烟草」「明戸古墳石棺」「里見軍戦死者の慰霊碑」、国府台合戦にまつわる悲しい伝承のある「夜泣石」などがあり、古戦場跡としても知られる。

ここは、2度に渡る国府台合戦の地で、国府台城跡、別名を里見城跡とも呼ぶ。「里見軍戦死者の慰霊碑」は、国府台合戦で敗れた里見方の慰霊碑で「里見諸将霊墓」「里見諸士群亡塚」「里見広次公廟」と並ぶ。公園を南に下ったところには、空海が住民のために掘り当てたと伝えられる「羅漢の井」がある。国府台合戦の際には、この井戸水が里見方の飲み水として使用されたとも。

17 江戸川堤とハケ：江戸川を渡る風が気持ちよいはずだ。ゆったり流れる江戸川堤の向こうには、東京スカイツリーも見える。そして、江戸川堤の東には、台地のハケが延々と続く。

根本排水機場辺りから堤を東へ下りると水神社がある。その先、根本橋付近から、静かに流れる真間川を望むと、少し向こうには桜並木が続いているが見える。

18 市川関所跡：江戸時代、江戸川にまだ橋が架かっていなかった頃は、川をはさんで「渡し」が設けられ、番所が置かれていた。その後、その番所が関所となり、この辺りで人々の往来を厳しく見張っていたという。

19 京成国府台駅：京成国府台駅で終了。

地図豆知識：河成低地と砂洲・潟（ラグーン）と市川

河成低地は扇状地平野、自然堤防型平野、三角州平野に区分される。埼玉県と東京都の境辺りが自然堤防型平野と三角州平野の境界にほぼ等しく、この上流で自然堤防の高まりや後背湿地が明確になる。他方、この南ではこれが不明となると同時に、砂洲・潟（ラグーン）などの海的作用による地形がみられる。市川市市街のこの辺りは、この砂洲の高まりと潟の低地がつくる低湿地であった。デジタル標高図の下辺に左右に伸びる高まりが砂洲、その上辺真間川に沿って低湿地が広がっているのがわかるはずだ。また、開発が進んでいない明治36年地形図では、高まりには林が広がり、低地には湿地の記号が見えるが、その後は開発が進んで、次第に不明となる。

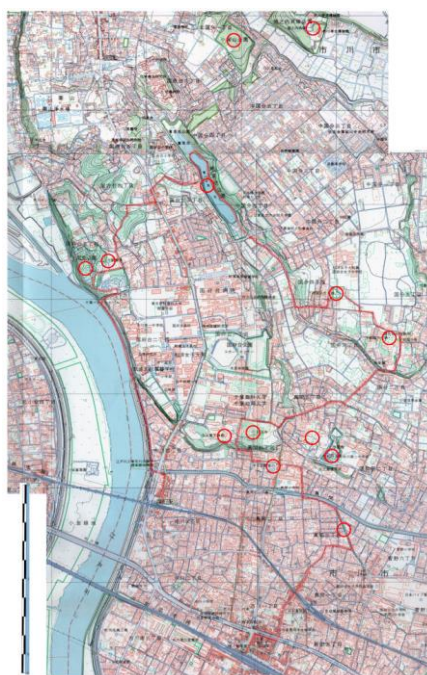
関東地方の小さな砂洲は、ほかに足立区の興野・島根・加平付近一帯、上野をつけ根として根岸から千住に伸びるもの、日本橋から浅草に伸びるもの、向島から北十間川に沿い江戸川区新川から浅草に伸びるものなどがある。

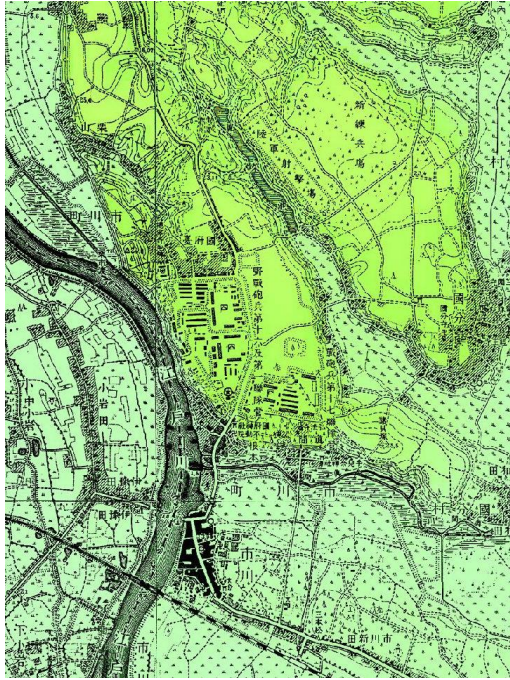
この市川砂洲とその北の下総の国の国府が置かれていた国府台との間に広がる低湿地は、古代から中世あたりまでは「真間の浦」「真間の入り江」と呼ばれる入り江が形成されて

いた。真間の浦は下総の国の国府の港（津）、いわゆる「国府津」としての役割を果たしていたと考えられる。そして、「市川」という地名は、流通の拠点となったことから「市河（市の立つ川）」ということから名づけられたのではないかとされている。

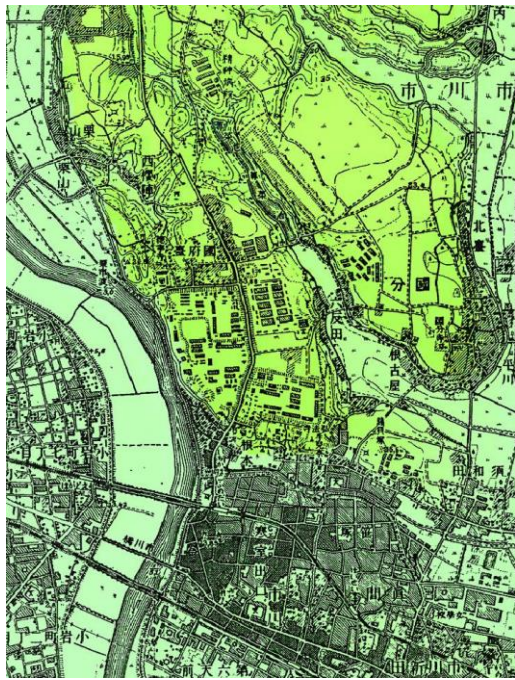
低湿地を望む国府台は、各種訓練に適した立地に恵まれていたことから、1885年（明治18年）に陸軍教導団が、1899年（明治32年）には教導団の廃止に伴って、陸軍の野砲兵連隊・国府台陸軍病院などが置かれ、市川は軍都として栄えた。そのことは、明治36年、大正6年、昭和20年の地図を参照すると明らかである。ただし、昭和20年の地図には軍事機密のことから軍施設はそのままだが、注記文字が消されている。

戦後は、同敷地に大学や研究施設が建設された。

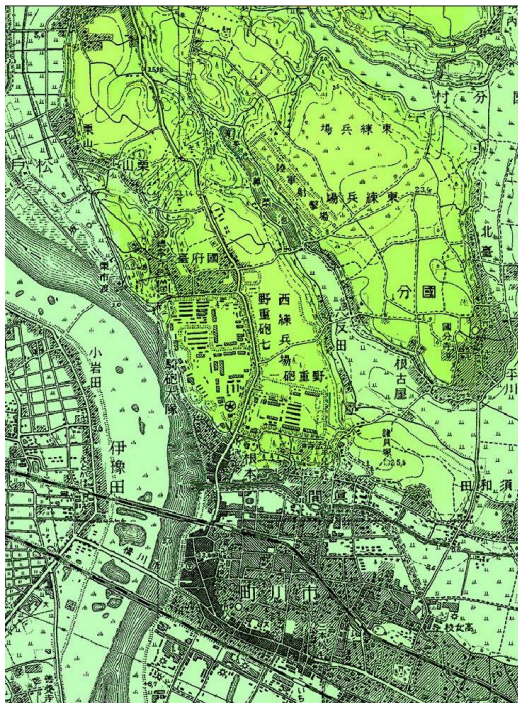




明治 36 年



大正 6 年



昭和 20 年

地図豆知識：国分寺（ウィキペディアより）

国分寺・国分尼寺は、741年（天平13年）に聖武天皇が仏教による国家鎮護のため、当時の日本の各国に建立を命じた寺院。

正式名称は、国分寺が金光明四天王護国之寺、国分尼寺が法華滅罪之寺。なお、壱岐や

対馬には「島分寺」が建てられた。

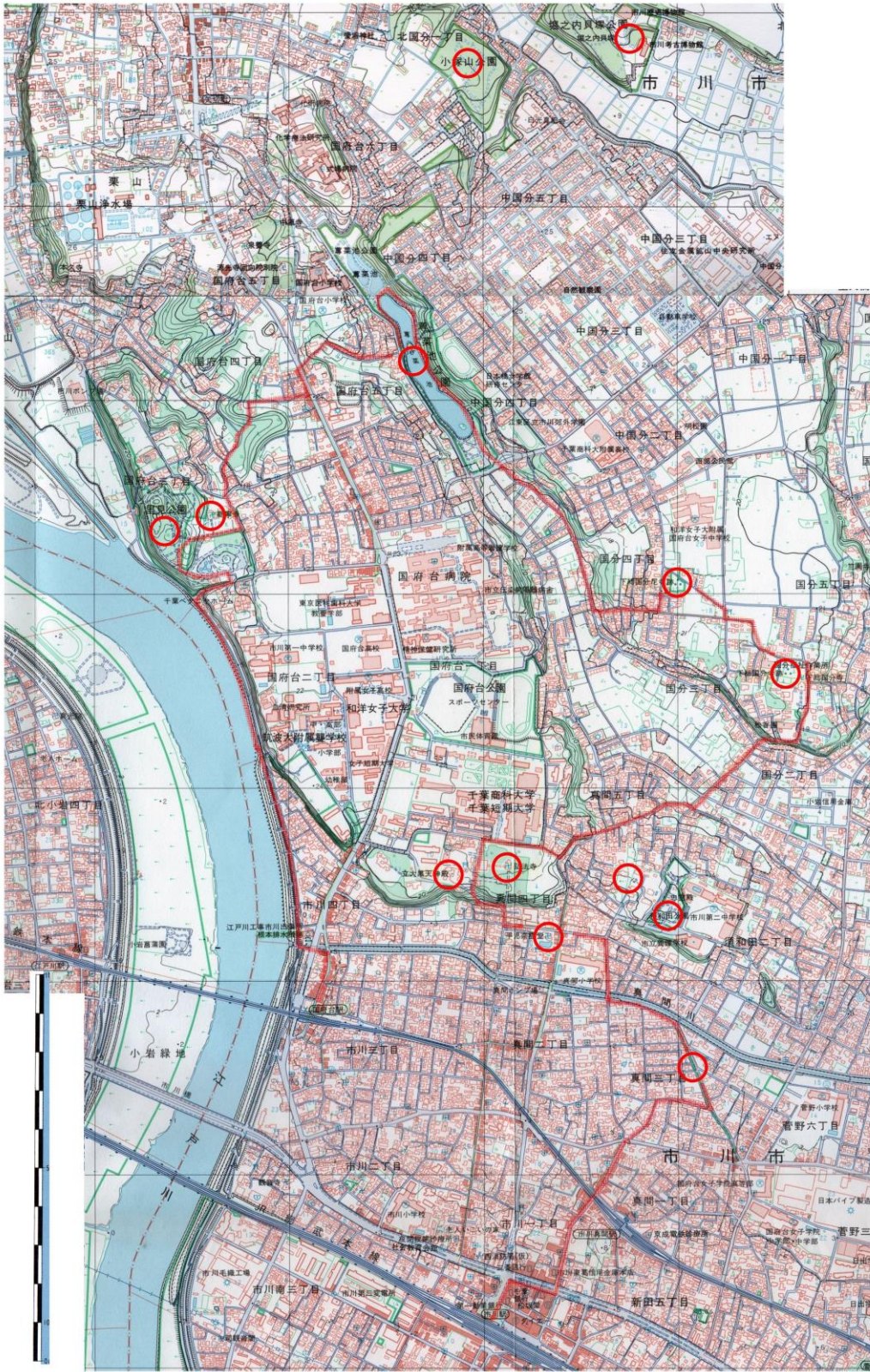
『続日本紀』『類聚三代格』によれば、天平 13 年（741 年）2 月 14 日（日付は『類聚三代格』による）、聖武天皇から「国分寺建立の詔」が出された。その内容は、各国に七重塔を建て、金光明最勝王経と妙法蓮華経（法華経）を写経すること、自らも金字の金光明最勝王経を写し、塔ごとに納めること、国ごとに国分僧寺と国分尼寺を 1 つずつ設置し、僧寺の名は金光明四天王護国之寺、尼寺の名は法華滅罪之寺とすることなどである。寺の財源として、僧寺には封戸 50 戸と水田 10 町、尼寺には水田 10 町を施すこと、僧寺には僧 20 人・尼寺には尼僧 10 人を置くことも定められた。[1]

国分寺の多くは国府区域内か周辺に置かれ、国庁とともにその国の最大の建築物であった。また、大和国の東大寺・法華寺は総国分寺・総国分尼寺とされ、全国の国分寺・国分尼寺の総本山と位置づけられた。

なお聖武天皇は、この詔の以前から、天平 9 年（737 年）には国ごとに釈迦仏像 1 軀と挟侍菩薩像 2 軀の造像と大般若経を写すこと、天平 12 年（740 年）には法華経 10 部を写し七重塔を建てるようにとの詔を出している。

律令体制が弛緩して官による財政支持がなくなると、国分寺・国分尼寺の多くは廃れた[2]。ただし、中世以後も相当数の国分寺が、当初の国分寺とは異なる宗派あるいは性格を持った寺院として存置し続けたことが明らかになっており[3]、国分尼寺の多くは復興されなかったが、後世に法華宗などに再興されるなどして現在まで維持している寺院もある。なおかつての国分寺跡地近くの寺や公共施設（発掘調査など）で、国分寺の遺品を保存している所がある。

ルートマップ



+***+ オフィス 地図豆 yamaoka mitsuharu +***+